

神とかけて天と解く。その心は？  
『ルバイヤート』から考える無常における神と天の責任追及

Alireza REZAEI  
国際日本文化研究センター共同研究員

龍谷大学指定研究プロジェクト「異文化理解と多文化共生」  
国際社会文化研究所叢書出版記念講演会：比較宗教文化を考える

(代表：国際学部教授 佐野 東生)  
2024年7月29日

ウマル・ハイヤーム  
という人物(1048～1131)

もともと「詩人」ではなく、数学・天文学などに通じた学者

- 三次方程式を解く方法を考案
- ハイヤームの三角形(後にパスカル三角形)
- 宗教ではなく、四季に基づいた暦の作成

(3300年に1日の誤差が生じる「グレゴリオ暦」に比べて非常に  
精度が高く、誤差は5000年ごとに1日とされている)

### 天文学者らしい四行詩の例(1)

東にしようが、西にしようが、死神が迎えに来る。

甘くとも苦くとも、人生がいずれ終わる。

楽しむがいい、おれと君と立ち去ってからも、

月は無限に満ちては欠けるのだから！

### 天文学者らしい四行詩の例(2)



我らを戸惑わせながらも廻り続ける天は  
たとえてみれば、走馬灯のようなもの。

太陽が灯火で、宇宙はその灯籠、  
そして我らは、浮かんでは消える影絵。

### 読み継がれる詩集：『ルバイヤート』

ペルシア文学作品の中で、  
『ルバイヤート』は量的にも修辞技法的にも  
権威ある他の作品に劣るものの、  
世界的には最も名高い作品です。

### イランの代表的な偉大詩人が詠んだ対句の量的比較

アッターール:	約95,000	対句
ルーミー:	約66,000	対句
フェルドウスィ:	約50,000	対句
ニザーミ:	約28,000	対句
サーディー:	約15,000	対句
ハーフェズ:	約4,500	対句
ハイヤーム:	約300?	対句

まさに、量ではなく質での勝負

### 修辞技法の一例：頭韻法 (alliteration)

本日は、  
暑  
い中、  
熱  
い思いを込めて、  
集  
まっていただき、  
厚  
く御礼申し上げます。

⇒「あつ」という音節を並べる

### 世界中で酒礼賛の詩人として知られるハイヤーム

エジプト



<https://cheersegypt.com/>

タジキスタン



<https://packagingoftheworld.com/>

イギリス



<https://omarkhayam.uk/>

イタリア



<https://bacchusdistributor.com/>

日本:「ルバイヤート」という商標名のワイン

丸藤葡萄酒工業株式会社(山梨県)



ルバイヤートワイン ギフトセット  
心をこめた贈り物にルバイヤートワインの  
ギフトセットをお役立てください

<https://www.rubaiyat.jp/>



イスラム世界の異端者  
とされる  
ウマル・ハイヤーム



『ルバイヤート』の真髄

世界中で、『ルバイヤート』は酒礼賛の詩集として知られる

しかし

神による人間創造の良し悪しをめぐる議論こそが  
その真髄

従って

反イスラーム的な内容

### 神による人間創造の良し悪しとは？

#### 人間創造に対する神(『コーラン』)の言い分

- 神に仕えるため
- 人間の中で誰の行いが優れているのかを試してみるため



『コーラン』における人間創造の不明確性

### 人間の生滅に関するハイヤームの言い分

われらの来たり去ったりする廻りにおいては、  
始めも見えなければ、その終わりも見えない。  
少しでもまことを教えようとする人はいない、  
われらはどこから来てどこへ去っていくのかを。

神の支配下に置かれていない  
「時間」そのものの主体性も別にあり得るのでは？

### 人間創造に対するハイヤームの言い返し

万有の主(神)が諸元素を混ぜ合わせたというのなら、  
なぜそれに、不備や不足を備えさせてしまうのか？  
出来が悪いなら、その欠点は誰によるものなのか、  
出来が良いなら、なぜそれを破壊させてしまうのか？

仏教でいう苦(生・老・病・死)に呼応

コーランの「神が人間を最も善美なものになされた」に対する皮肉

### 仏教における無常

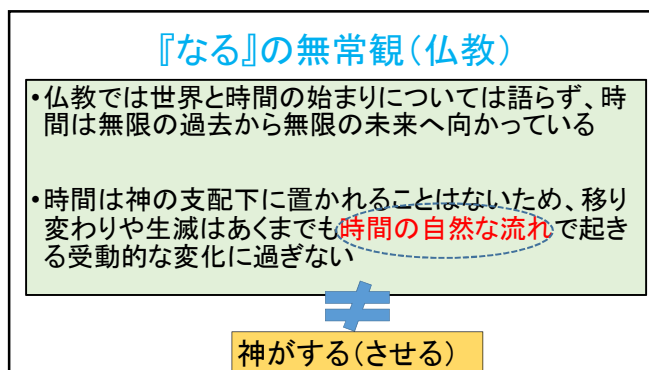
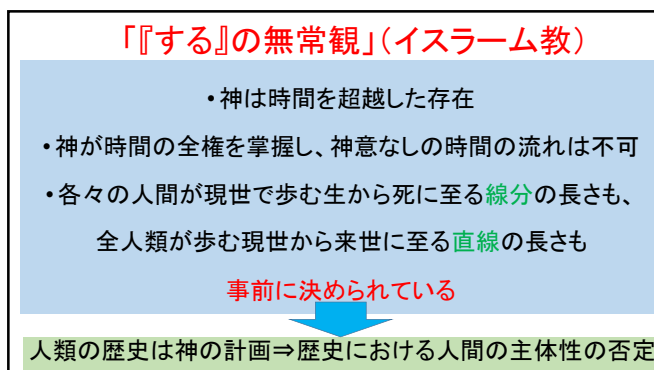
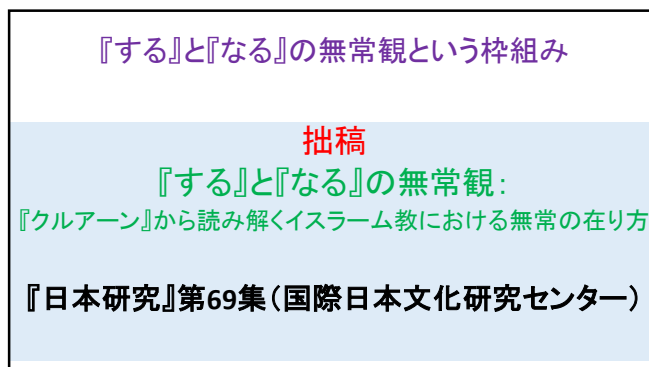
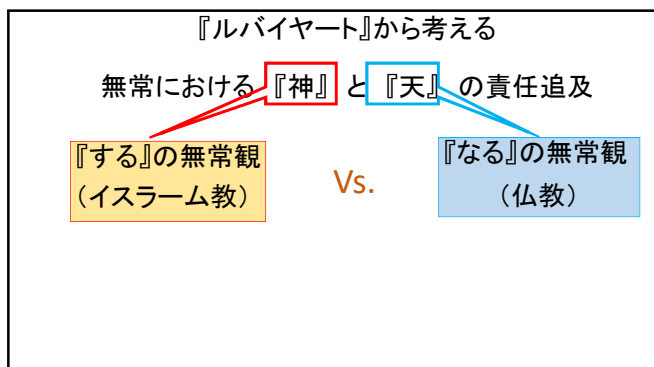
- 永遠なる存在が否定され、万物の無常なることは主張される。
- この世の生は苦と捉えられるが、苦の原因として無常が挙げられる。



無常とは:

時間に伴う変化

生・老・病・死のような苦も時間的変化によって生ずる



## 『ルバイヤート』の無常観

『ルバイヤート』では「する」のみならず、「なる」の無常観も確認できる

時間の流れにおける**神の主体性のみならず**、  
 神から独立した**時間の流れの主体性**も確認できる

世の中の無常は、  
**神の仕業**として描かれる四行詩もあれば、  
**時間の流れの結果**として描かれる四行詩もある

## 『ルバイヤート』における時間の流れの描写

- Falak [天・天球]
- Charkh-e falak [廻る天]
- Charkh [輪・時間の廻り]

天

昼夜・季節の交代のように調和を保った上で廻っているため、  
 天の道理・自然の摂理といった意味の「天輪」も含まる

天は、時間の流れ ≅ 時間そのもの

## 「神」と「天」の位置づけの問題

「天」を「神」から独立して、あるいは神と並行して世界  
 を司るもののような形而上的な事柄と捉えれば

時間の流れでの無常は、  
**神と天**、どちらの**管轄範囲**になるのか？

「する」と「なる」の無常観が両立する  
 思想的背景

ゾロアスター(拝火教)

善悪二元論に基づいた古代イラン発祥の宗教

ゾロアスター教の善神:

アフラ・マズダ



マズダと言えば

ゾロアスター教の神「Ahura Mazda」

と

マツダ自動車の社創業者「Matsuda (松田重次郎)」の姓  
にちなんで



ゾロアスター教の悪神:

アフリマン



アルダシール1世(241年没)の  
馬に踏まれるアルタバノス4世

アフラ・マズダの馬に踏まれる  
アフリマンのレリーフ

イランにおける「善悪二元論」から「天神二元論」への  
パラダイムシフト

古代イランでは悪を悪神に帰させることができたため、  
老いることや死ぬことに対する悩み・不満も処理できた

一神教のイスラームが登場することで、  
悪を神に着かせることは不可能となる

イランの詩人たちは非難を免れるためには、  
世の中の無常の責任を天に負わせるようになる

## 『ルバイヤート』における神と天の相関性

- ① 神の主体性が示される四行詩
- ② 天の主体性が示される四行詩

## ① 神の主体性が示される四行詩(その一)

大地と廻る天を建てられたあの方こそは、  
あまたの哀れな心に傷痕を残してきた方だ。  
夥しい紅玉の唇やら、麝香かおる黒髪やらを、  
丸い大地のなかにしまってしまったあの方。

## ① 神の主体性が示される四行詩(その二)

もともとかれによって無理やりに存在させられた身だが、  
生きる上で、戸惑い以外何も得させてくれなかった。  
嫌々死んではいくが、結局わからずじまいなのは、  
このように来たり生きたり去ったりすることの目的だ。

『コーラン』:

「神こそはあなたがたに生を授け、間もなく死を与える」

## ② 天の主体性が示される四行詩(その一)

廻る天よ、消滅はお前の憎しみによるものだ。  
人を苦しめるのもお前の古くからのやり方。  
大地よ、お前もそのふところを切り開けば、  
そこにどれほどの尊い宝石が潜んでいるのか。



## ② 天の主体性が示される四行詩(その二)

廻る天を打ち負かした人がこれまでいたか、  
人を呑み込む大地の腹が満ちてたまるか。  
まさか俺は違うと思いがっているとも？  
焦るな！お前が呑み込まれずに済んでたまるか。

## 現世の無常に対する『コーラン』の構え

• 現世の無常は、復活が起こることで来世の常住に  
取って代わる⇒人間創造の目的の完結

• 無常を正当化するために、  
来世における「新しい創造」や「創造の繰り返し」と  
いった概念が挙げられる。

現世の無常に関する  
イスラーム教の世界観の要点

人間は無責任に死後の世界に放り出されることはない



ときには天に八つ当たりしながらも、  
無常における神の責任を追及するハイヤームの視点も、  
イスラーム教の世界観に則った視点

## 現世から来世へ続く一神教における神の計画

• 神の計画は来世での再創造を前提としたものである。

• キリスト教の世界観に対する丸山眞男の指摘：

神は時間そのものをも創造する超時間的永遠。

歴史は神の計画の実現過程であり、

また、歴史は人間が、

神の計画目的を自己の責任において遂行する場でもある。

### 神の長期計画に対するハイヤームの疑問

神による創造をめぐって、  
完全に蚊帳の外扱いにされた人間が、  
そもそもなぜ自己の責任において神の計画目的を  
遂行しなければならないのか？

### 時間に関する

イスラーム教とハイヤームの見解の食い違い

イスラーム教：  
神の主体性・支配性一途の世界観

Vs.

ハイヤーム：  
天の主体性・支配性も別にあり得るのでは？

### イスラーム教： 神の支配性・主体性一途の世界観

時間の流れにおける人間の歩むべき道が**具体的**  
に描写されているため、神こそがこの流れを支配し  
ているという「**信仰心**」さえあれば、自己の消滅の  
不可避性という虚無の感覚に陥るはずもない。

イスラームは「終わりさえ見れば総て良し」の宗教

### ハイヤーム： 天の主体性・支配性も別にあり得るのでは？

「時間」(天)を、もしかすると神の支配下に置かれ  
ていない、いわば無責任に何もかもを消滅させてし  
まうものとして捉える傾向もあるため、彼にとっての  
時間は**抽象的に**無限化されたものとなり、これは  
自ずと虚無感を生んでしまう。

### ハイヤーム的虚無感

思いどおりになったなら来はしなかった。  
思いどおりになるものなら誰が行くものか？  
この荒家に来ず、行かず、住まずだったら、  
ああ、それこそどんなによかったろうか！

### 神と天の管轄範囲を区別し切れないハイヤーム

#### 『コーラン』

「天」や「時間」がいかに神に  
支配下に置かれているかを  
示す数多くの記述

#### ハイヤーム

•天体の構造や時間の在り  
方について考える天文学  
•線の長さ・短さ、数字や方  
程式について考える数学



対



天・時間を神から独立した観念と捉えていいかどうか  
という悩み

### 『ルバイヤート』の真髄

われらの来たり去ったりする廻りにおいては、  
始めも見えなければ、終わりも見えない。  
少しでもまことを教えようとする人はいない、  
われらはどこから来てどこへ去っていくのかを。

換言すれば

無常なる現世という線分においては、  
過去から未来へ続く直線の長さが見えない。  
宗教の教義も鵜呑みにできないから  
不可知論的な立場を取るしかない。

### 「神」と「天」という当事者同士の 「遣らせ」を指摘するハイヤーム

神のようにわが手で天を司ることができたなら、  
わたしは今のような天を取り扱ったにちがいない。  
そしてあらためてまっさらな天をつくりだすことで、  
それを人の思いのままになるようにしたにちがいない。



被告人 兼 裁判官(神)の無慈悲

- 「神は、その行われたことに就いて、尋問を受けることはなく、人間たちこそが尋問されるのである。」(21: 23)
- 「人間に訪れるどんな幸福も神からのものであるが、どんな災厄も人間自身から来るものである。」(4: 79)

なんでやねん!

被告人 兼 裁判員(天)の無慈悲

だれにもその秘密を明かしてくれない天だが、  
無情にも無数の主人と召し使いを殺めてきた。  
長く居させてもらえない以上、酒を飲むがいい。  
この世を去る者は二度と帰って来ないのだから。

神とかけて天と解く。その心は？

地上にある万物は消滅するが、  
永遠に変らないものは神のみ!

無常の波に飲み込まれない神	時の流れで成り立っている天
↓	↓
神の常住性	天の無常性

どちらも

## 今日の発表をまとめた刊行物

ソリッドなく無常／フラジイルなく無常  
—古典の変相と未来観—  
(荒木浩編)

思文閣出版(2024年度末頃出版予定)

## 参考文献

- ・小川亮作訳2002『ルバイヤート』、岩波文庫年。
- ・加藤周一2009『日本文化における時間と空間』、岩波書店。
- ・新村出編1994『広辞苑第四版』、岩波書店。
- ・中田香織訳・中田考監訳2002『タフスィール・アル=ジャラーライン(ジャラーラインのクルアーン注釈)』(第一巻～第三巻)、日本サウディアラビア協会。
- ・中村公則2002『ウマル・ハイヤーム』岩波 イスラム辞典』前掲。
- ・廣松渉ほか編1998『哲学・思想事典』、岩波書店。
- ・真木悠介1992『時間の比較社会学』、岩波書店。
- ・丸山眞男1998『丸山眞男講義録(第七冊)日本政治思想史1967』、東京大学出版会。
- ・三田了一2001『日亜対訳聖クルアーン』第6刷、日本ムスリム協会。
- ・三田了一1972『日亜対訳・注解 聖クルアーン』、日訳クルアーン刊行会。
- ・森章司1987『仏教比喩例話辞典』、東京堂出版。
- ・Eslāmi Nodūshan, Mohammad Ali. *Nārdāneha: gozideyi az robāihāy-e fārsi*, Naghmeh-Zendegī, Tehran, 2002.
- ・Forūghi, Mohammad Ali, & Ghanj, Qāsem. *Robā'iyāt-e Hakīm Omar Khayyām-e Neishābūrī*. Enteshārāt-e Golbārg, Tehran, 1996. [本文ではF & Gh.]
- ・Hedāyat, Sādeq. *Tarānehāy-e khayyām*. Enteshārāt-e Amirkabūr, Tehran, 1963. [本文ではH.]
- ・Homāyi, Jalāl-al-Dīn. *Robā'iyāt-e Khayyām (Tarabkhāne): Yar Ahmad-ebn-e Hossein Rashīdī Tabrizī*. Nashr-e Homā, Tehran, 1988. [本文ではHomāyi.]